

リベラリズム

これは、自由な社会活動という、西洋における絶対正義である。また人道性という判断と両輪し世界は存在する。他方においては強権と強制、非人道的現実がこの正義において裁かれるのである。

自由な社会活動は、それにおいてヒエラルキーを形成する。この最下層は、社会的弱者であり、貧困である。

また自由経済システムという、彼らの活動の場が存在する。これらが概略において世界の全ての現実への説明である。

自由な社会活動というリベラリズムは、強制における社会の隷属という現実と対比するものである。しかしリベラリズムは、社会倫理性の進歩において、新しい哲学性における現実の構築を他方において、誕生されることになる。

これは、権力主義と人民主義という対比が存在し、西洋に源流する社会学の進歩は、既存現実への疑問を問うことが存在するのである。

これはリベラリズムが完成された現実であることは、自由社会という正しさの証明であることなのであり、社会学という進歩性がこれと共に新しい世界の創造を提案することができるのである。

真実においてこれは双方が、西洋におけるルーツを有するのである。そのため西洋における世界の絶対的なプレゼンスが存在するのである。

これは近代におけるコンピュータにおける利便性と産業革命、次世代エネルギー、環境などへの新しい基準において、世界が歴史という過程を経て、初めて未来へ至り、その未来は宇宙との連携や参加における宝瓶宮の時代という幕開けを有するのである。

これらは融和という新しい世界のルールを提案し、世界の融和は新しい可能性を未来へ与えることができるのである。

これらは戦争という過去から希望という未来への転換であり、これらは政治における合意が、これらを可能として与えることができるのである。